

## 解脱の宝飾 第7章 p.145～

## 悲

悲についての撰義は、「区別、所縁境、形相と修習する方便、修まった程度、功德 — そのようにこれら六つにより、悲無量は包摂されている。」というのです。

p.141 の「慈」と同じくここは目次です。

悲も、「区別・所縁境・形相・修習する方便・修まった程度・功德」から成ります。

- |                  |                |   |
|------------------|----------------|---|
| 1) དབྱེ་བ་       | 区別・分類・差別       | classification (区別)                           |
| 2) དམིགས་ལུལ་    | 熟視する・熟慮する + 場所 | 目標・目的・目的地 object of thought, meditation (所縁境) |
| 3) རྣམ་པ་        | 容貌・様子・見た目      | aspect / manner / way, form (形相)              |
| 4) སྒྲིམ་ཐབས་    | 修習する方便         |   |
| 5) འབྲུངས་ཚད་    | traind + 計量・限度 | (修まった程度)                                      |
| 6) ཡོན་ཏན་       | 功德             |   |
| སྤོང་རྗེ་ཚད་མེད་ | 悲 + 無量の・際限のない  | (悲無量) → 四無量心                                  |

## 悲の区別

それについて [対象を通じて] 区別するなら、三つ。

- 1) 有情を縁ずる悲と、
- 2) 法を縁ずる悲と、
- 3) 無所縁の悲です。

そのうち、第一は、有情の悪趣の苦などが見えるので悲が生ずるのです。

第二は、自己が四聖諦を数習するとき、[集から苦、道から滅となる] 二種類の因果を知って、[事物について] 常と一団だと執らえることから知を退けます。他の有情 — 因果を知らずに常と一団だと執らえる者たちに対して、そのたびに「錯乱だ」と悲が生ずるのです。

第三は、自己が等至 (三昧) に入ってから、一切法は [自性による成立について] 空だと証得するとき、有情 — 事物 [の实在] を執らえる者たちに対して、特別に悲が生ずるのです。すなわち、「菩薩は等至 [に入定] したことにより数習の力により完成したなら、事物を執らえる魔により捕らえられた者に対して、特別にまた悲が生ずるのです。」と説かれています。

その三つのうち、この個所においては第一の [ : 有情を縁ずる ] 悲それを修習するのです。

## 悲の所縁境

その縁する境は、一切有情です。

「悲」の区別も p.141 の「慈」と同じく3つで、2) の所縁境によって分けます。

たいへんおおざっぱにまとめてしまうと…

- 1) 有情を（縁ずる）対象とする悲は、衆生の悪趣の苦しみを見ることで起こる。
  - 2) 法を（縁する）対象とする悲は、自分は四聖諦を修習した折りに2つの因果を知ってすべて常だと捉える心から離れた（＝無常を理解した）が、他の有情は因果を知らずにすべて常だと捉えているので、錯乱だと思って起こる。
  - 3) 無所縁の悲は、自分は等至に到って一切法の空性を理解したが、有情は実体と捉えているので、格別に起こる。
- …ということのようです。

私たちは2) 3) の境地にとっても到っていませんので、ここでは1) を学びます。

☆「四聖諦」について 『実践チベット仏教入門』春秋社 p.278 より引用

「四諦」は、仏教の根本教理となるもので、ごく簡単に説明すれば次のとおり。

- ①苦諦：輪廻世界の本質は苦である。
- ②集諦：苦の原因（集めて起こすもの）は業と煩惱である。
- ③滅諦：煩惱を断じて苦を滅した境地こそ、覚りそのものである。
- ④道諦：滅の境地を得る方法は、声聞・縁覚・菩薩の各乗における五道である。

☆「[集から苦、道から滅となる] 二種類の因果」

- ②集諦→①苦諦 業と煩惱があるから輪廻の苦がある
- ④道諦→③滅諦 その方法（道）を行えば苦が滅する

そして「悲」が目的とするのも、「慈」と同じく一切有情です。

### 悲の形相

形相は、苦および[その]因を離れてほしい[という]知です。

བྱམས་པ་                      བདེ་བ་དང་ཕྱད་པར་འདོད་པའི་སྒྲོལ་།

「慈」の形相は、「楽と会わせたいと欲する知」。 (p.142 1行目)

= 与楽 (Thanks for 小倉さん)    ≙ 「楽（と楽因）を得んことを」 (四無量心)

སྒྲོལ་རྗེ་                      སྤུག་བསྐྱལ་རྒྱ་དང་བཅས་པ་དང་བྲལ་བར་འདོད་པའི་སྒྲོལ་།

「悲」の形相は、「苦とおよびその因を（いっしょに）離れてほしい（と欲する）知」。

= 拔苦 (Thanks for 小倉さん)    = 「苦と苦因を離れんことを」 (四無量心)

མཛོག་                      知    mind, intellect, understanding    心・精神・知恵

སེམས་                      心    (ordinary) mind, thought, intent, cognitive act , attention, soul

### 悲を修習する方便

それを修習する方便は、根本の〔今生の〕母に適用してから修習します。

それもまた、自己の根本の母それが、この地方において他の者たちにより、切り刻まれている。または煮て焼かれている。あるいは凍えきって〔凍傷になり、〕身体には水膨れになっている。〔水膨れが〕破れてからまた割れているなら、大いに〔あわれだ、苦から離れてほしいという〕悲です。

同じく、地獄に生まれたこれら有情は、私の母であると決定したなら、そのような苦により〔断末魔で〕事切れるなら、〔あわれだという〕悲が生じないでしょうか。彼らが苦および〔その〕因を離れてほしい〔という〕悲を、修習するのです。

また私のその母が、この方向において飢えと渇きにより虐げられている。病と痛みで悩まされている。怖れて惨めであるので、意気消沈しているなら、大いに〔あわれだという〕悲です。

同じく、餓鬼に生まれたこれら有情もまた、私の母であると決定したなら、そのような苦により損傷されているなら、〔あわれだという〕悲が生じないでしょうか。彼らが苦〔とその因〕を離れてほしい〔という〕悲を、修習するのです。

また私のその母が、この方向において老いて貧しい、または他の者たちにより自由なく〔無理やりに〕使役され扱われる、または殴られ罵られる、または殺されて切断されるなどされているなら、〔あわれだという〕悲です。

同じく、畜生に生まれた一切有情もまた、私の母であると決定するなら、そのような苦により困窮しているなら、〔あわれだという〕悲でないでしょうか。彼らが苦〔とその因〕を離れてほしい〔という〕悲を、修習するのです。

また私のその母が、千ヨージャナ転落する大きな断崖絶壁にいて、気をつけることを知らない。「断崖絶壁に行くよ」と教えてくれる人がいない。そこから墜ちると、大きな苦を経験するし、上に抜け出す暇の無い断崖絶壁への転落に近づいているなら、大いに〔あわれだという〕悲です。

同じく、〔善趣の〕天と人と阿修羅の三つもまた、悪趣の大きな断崖絶壁にいて、気をつけて罪悪・不善を捨てることを知らない。善知識により摂取されていない。〔いずれ〕転落と三悪趣の苦を経験するし、抜け出すことは難しいから、〔あわれだという〕悲でないでしょうか。彼らが苦〔とその因〕を離れてほしい〔という〕悲を、修習するのです。

p.142 で学んだ「慈」を修習する方便は、

「慈の根本は恩を念ずることに掛かっているので、有情の恩を思惟します」。「今生において恩が最大なのは自己の母」であることから、母の恩を詳しく学びました。

そして「悲」を修習する方便においても、今生の母を適用します。

ふたたびおおざっぱにまとめますが…

・今生の母の身体が切り刻まれて云々

→ 地獄の有情を私の母であると思えば、その苦と苦の因を除きたい

・今生の母が飢えと渴きに云々

→ 餓鬼を私の母であると思えば、その苦と苦の因を除きたい

・今生の母が使役され云々

→ 畜生を私の母であると思えば、その苦と苦の因を除きたい

・今生の母が断崖絶壁にいて云々

→ 天と人と阿修羅を私の母であると思えば、その苦と苦の因を除きたい

…というふうには悲を育てていきなさいと書いてあります。

### 悲が修まった程度

修まった程度は、自己を大切に執らえる [我愛の] 綱を断って、一切有情について離れてほしい [という、] 言葉のみでない知が生じたなら、悲が修まったのです。

རང་ལ་གཅེས་པར་འཇིན་པའི་

自分を + 愛する・愛しむ + 捉える → 「我愛の」

གདོས་ཐག་

rope of a boat

ཚིག་ཙམ་

mere words, merely at the level of words 「言葉のみ」

悲を修めるのは、かなりハードルが高いことが分かりました・・・

### 悲を修習したことの功德

それを修習したことの功德は無量です。『観自在 [菩薩] の因縁』に、「一つの法が有るなら、仏陀の一切法が掌中に置かれたようになる。一つとは何かというと、すなわち大悲です。」と説かれています。『法集経』にもまた、「世尊よ、すなわち転輪王の輪宝があるところ、そこには軍勢すべてがあるのです。世尊よ、同じく菩薩の大悲があるところ、そこには仏陀の一切法があるのです。」と説かれています。『如来秘密経』にもまた、「秘密王よ、一切智者の智慧それは、悲の根本から生起したものです。」と説かれています。

p.144 ~ 5 「慈を修習したことの功德」も無量でしたが、その項の終わりに、「そのように慈について修まったことにより、悲が修まることに困難が無いのです。」と書いてあります。ガンポパ大師の時代から、誰にとっても難しいことなのかもしれませんね。

そのように慈により有情たちが楽を得ることを欲するし、悲により苦を離れることを欲するとき、自己ただ一人が寂静の楽を得ることに悦びません。有情 [の利益] のために仏陀 [の位] を得ることに歓喜するので、寂静 [の辺] に執着することの対治になるのです。そうならば、慈・悲が [心] 相続に生じたことにより、自己より他者を大切に執らえるとき、すなわち、『菩提道灯論』に「自相続の証得した苦により、他者の苦すべてを正しく尽きさせることを欲するその人は、最上です。」と説かれているように、[三士のなかでも] 最上の人士の知が生じたのです。例えば、バラモンのマハーダッタ (大施) のようなものです。

[以上が、]『正法如意宝珠・解脱の宝の莊嚴』より、「慈と悲」を説いた第七章です。

ཞི་བདེ་

平和 + 幸福 peace and happiness

personal salvation and peace (goal of arhats) 「寂静の (安) 楽」

第7章は、p.141 「いまや、寂静の安楽に執着することへの対治として、慈と悲 [の無量心] を修習することを説明しましょう。」という文で始まったことを思い出しましょう。私たちは寂静の安楽に執着することへの対治として「慈」と「悲」を学んできたのでした！

因は仏性如来蔵 (第1章)

依処は人身最勝宝 (第2章)

縁は尊き善知識 (第3章)

方便彼の口訣にて (第4章～)

- ・今生での活動領域に執着することへの対治 = 無常 (第4章)
- ・有の安楽に執着することへの対治 = 輪廻の苦 (第5章) と業果 (第6章)
- ・寂静の安楽に執着することへの対治 = 慈悲 (第7章)
- ・仏を成就する方便を知らないことへの対治

果なるは無上正等覚

事業は無別の済度なり

(Thanks for 丸山さん)

☆ 最後にもう一度、アティシヤの『菩提道灯論』をひいておきます。本書 p.400 にも和訳がありますが、『全訳アティシヤ 菩提道灯論』望月海慧訳 起心書房 から・・・

何らかの方法で輪廻の楽しみだけを自分自身のために求めている人は劣った人と知るべきである。存在の楽しみに背を向けて、罪となる行いから退くことを本質として、自分の寂静だけを求めている人は「中位」と言われる。自らが相続している苦しみにより、他者の苦しみをすべて完全に尽くすことを何よりも望んでいる人は最高である。

！ありがとうございました！